

病弊その三 読み書き同時教育が学習効果を落とす

その三は、「明治以来の読み書き同時教育が、子供の漢字学習意欲を弱め、学習効果を落としている」ことである。

そもそも、読みは“理解”行為であり、書きは“表現”行為である。表現するには、その表現しようとする内容が十分に理解され身につけていなくてはならない。字形についての認識もまだ不十分なうちから書く練習をさせられても、それが正しく美しく書けるはずもないが、それよりも問題なのは、書いたものの良し悪しが評価できないことにある。

一点一画ごとに手本と見比べてその通りに書き写すだけで精一杯。それが正しく書けているかどうかさえ自分では判断できず、まして、美しく書けているかどうかはとても判断できない。

漢字を十分に読む学習を重ね、その漢字の字形が頭の中に一瞬のうちに描けるようになるのを待って、書く学習に移れば、一点一画ごとに手本と見比べる必要もなく、容易に書けて、しかも正しく美しく書けたかの判断もできるので、書く意欲も高まり、従ってわずかの練

習で進歩が著しい。これについては、新潟県亀田東小学校の五年間にわたる貴重な実験がある。

そこで、次のようにすることをお奨めする。『各学年の配当漢字を、その学年以前に提出し、十分に“読む”機会を与えておく』ことである。こうすれば、その漢字を該当学年で“読み書き”同時に学習することになっても、実際にはすでに“読み”はでき上がっているのに、容易に“書き”ができて上がるのである。